
僕から君へのプレゼント

はっぴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕から君へのプレゼント

【Nコード】

N4912B

【作者名】

はっぴ

【あらすじ】

小学1年生の2人に、ひなまつりがやって来た！！蘭は、ひなまつりをとても楽しみにしていた。そんな蘭を見て、新一はある行動に出る

「新一、ねえ新一ってばあ!!」

「何だよ蘭」

まだ、小学1年生の2人が公園のベンチに座って、お話しをしていた

「あのね、もうすぐ蘭がスツゴク、楽しみにしてたことをやるんだよ♪」

「なんだよ、その楽しみなことって?」

「なんだと思う?」

蘭はニッコリ笑って楽しそうにしゃべっていく

新一は、そんな蘭を見てドキツとする

「え、えっと……3月だから誕生日でもないし、クリスマスは12月だし、お正月でもないし……」

新一は顔を赤らめながら、手をあごにつけて考え始めた

このポーズは、小学1年生の頃からやっているみたいだ

「んつと……えつとお……!!明日やる音楽のことだなあ!!俺にそんなことを思い出させようとして、イヤミかよ!?!」

「え、ええー！？そんなんじゃないよお」

蘭は少し、顔を下に傾けた

新一は、そんな蘭をじと目でずっと見つめていた

「…………じゃあ、なんだよ」

新一の問いかけに、蘭は嬉しそうにニツコリと笑った

「お・ひ・な・ま・つ・り♪」

笑顔で言う蘭とは逆に、新一は不思議そうな顔をしていた

「なんだ？そのおく…………お、お、おひなまつりって？」

「ええー！！新一、おひなまつり知らないの？クラスのみんな知ってるよ！」

蘭は目を大きく見開いた

「し、知らないんだから……………しょうがないじゃん」

新一はまた、顔を赤らめる

「おひなまつりっていうのはね、えっと……………お、女の子だけが祝う日なの！おひな様とおだいり様を飾ってね、他にもご、五人囃子？とかいう人達もいてね♪」

蘭は身振り手振りで楽しそうに説明した

「と・に・か・く、すっごく楽しみなの♪」

蘭は、目をキラキラと輝かせた

「ふーん、とにかく女の子だけが祝う日なんだろう？男の俺には関係ねーやつ!!」

新一は、口調からしても興味なそうに、ブスツとした顔で答えた

「ちゃんと、おひなまつりの歌もあるんだよ」

蘭は、自分の顔を新一の顔に近づけた

「わわっ……う、歌なんて嫌いだ……」

蘭がいきなり顔を近づけてきたため、新一の顔は真っ赤になっていた

「もー!!せっかくおひなまつりのことについて、教えてあげたのに……」

新一は一瞬苦笑いを浮かべ、ニコツと笑って言った

「じゃあさ蘭、その歌何番まで歌詞あるんだ？」

蘭は、その言葉を待っていたように「うん!」と笑顔で答えた

「えっとねえ、確か4番位まであったよ♪」

「へえースゲー!4番まであるんだ」

「うん！全部の歌詞、覚えたいなあ♪」

蘭は嬉しそうにキャツキャと飛び跳ねた

そんな蘭を見て、自然と新一の顔にも笑顔が浮かんだ

☆おひなまつり☆
当日

「新一♪」

「ん？」

今日も最高のスマイルを持って、新一の元にやって来る

「今日は3月3日、蘭がすっごく楽しみにしてた おひなまつりの日だよ!!」

蘭の顔に浮かんだ笑顔は絶えることなく、ずっと浮かんでいる

「な、なあ………蘭」

「何? 新一」

スマイルを保ちながらも、蘭はしっかりと新一の目を見る

だが新一は、その目を下に右に左にとグルグル、グルグルと泳がせる

「あ、あのな……蘭、渡したいもんがあるんだけど」

新一は、ズボンのポケットに手をつっこんだ

そこから出てきたのは、可愛くりボンで結ばれた小さな袋だった

「はい、コレ」

そう言って、顔を真っ赤に赤らめながら蘭に渡す

「ありがとう!! 開けても良い?」

新一は何もいわずに頷いた

蘭は、ていねいにリボンを取る

そしてゆっくりと、袋を開けた

そのとたんに、蘭の瞳は今までも増してキラキラと輝いていく

そして、満面の笑みが浮かんだ

「可愛い♪新一、ありがとう！！すごく嬉しいよ」

新一が渡した袋の中には、可愛い白いうさぎがついたヘアゴムが入っていた

「ら、蘭って……………いつも髪の毛おろしてるからさ、たまには結んだらどうかなんて……………か、か、可愛いと思うよ」

新一の顔はみるみる内に赤くなっていく

「うん！ありがとう♪さっそく、後でお母さんに結んでもらうネ」

蘭は、白いうさぎがついたヘアゴムを、スカートのポケットの中に大切そうにしまった

「でも、どうしてプレゼントをくれたの？今日は蘭の誕生日でも何でもないよ？」

蘭は首を傾げる

新一は、恥ずかしそうに顔を下に向けながら話した

「か、母さんに聞いたら今日がおひなまつりの日って言って……………」

……だから、そのプレゼントは……おひなまつりだから、俺からのプレゼント」

新一は、真っ赤になった自分の顔を隠すようにそっぽを向いた

「蘭のために……嬉しい♪ありがとう!! 新一」

蘭は、頬っぺたにピンク色のチークを塗ったように頬っぺたを染めていた

新一は、そっぽに向けていた顔を元に戻し、蘭の顔を見る

するとまた、顔を赤らめてそっぽを向いた

☆次の日☆

「新一く見て見て♪」

蘭が新一の元に駆け寄っていき、服の袖を掴んだ

新一がクルッと後ろを振り向く

「なんだよ、蘭……………あっ」

新一の顔が一瞬にして変化した

つまんなそうな顔から、明るい顔にパツと変わる

蘭の髪の毛は、白いうさぎがついたヘアゴムを左右につけて、可愛く2つ結びをしている

「ねえ、新一どう？」

蘭がピョンピョン飛び跳ねる

その度に、2つ結びの髪の毛も一緒にピョンピョン飛び跳ねる

「え、えっとお」

「どう？」

新一は、決心したようにしっかりと蘭の目を見た

「か、か、か……」

「可愛いよ……とっても」

「ありがとう、新一♪」

(後書き)

読んでくださった方、ありがとうございます☆
小さな蘭&新一、大好きです♪

もしかしたら、また書きちゃうかもしれません!!
どうか、その時も宜しく願います☆

評価&感想も一言でも良いので、願います♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4912b/>

僕から君へのプレゼント

2010年12月14日19時14分発行